

当院で経験した肺炎球菌菌血症症例の解析

¹東京医科大学病院 感染制御部

○高見澤 重篤¹、中村 造¹、清水 博之¹、福島 慎二¹、
水野 泰孝¹、千葉 勝己¹、松本 哲哉¹

【目的】今回、当院での症例を検討し、肺炎球菌が原因の敗血症にて現在報告されている諸々の事項についてどこまで合致するかを判定することにした。【方法】当院にて2010年3月から2年間の間に施行された血液培養で肺炎球菌が検出された21症例のうち診療録が閲覧可能であった20例(肺炎4症例、非肺炎16症例)について検討した。検討事項としては肺炎球菌のリスクファクターである年齢(65歳以上、もしくは2歳未満)、脾臓摘出・肝疾患・慢性肺疾患・慢性心疾患・慢性腎疾患の有無、路上生活者かどうか、WBC値、ALT値、Hb値、CRP値、肺炎球菌尿中抗原検査、予後とした。【結果】20症例のうち、65歳以上9例、2歳未満6例、脾臓摘出0例、肝疾患1例、慢性肺疾患1例、慢性心疾患3例、慢性腎疾患2例、路上生活者1例、指摘されている基礎疾患がない14例(70%)、また65歳以上のみで基礎疾患が無い症例は4例(44%)であった。発熱は平均38.4℃、WBC値は平均15555個/ μ l(200~30100)、ALT値は平均38.5IU/L(4~269)、Hb値は平均10.75g/dl(6.1~15.9)、CRP値は平均16.2mg/dl(1.4~45.2)、尿中抗原検査を施行した症例は6例(2歳未満1例、65歳以上3例、他2例)、うち陽性は3例(65歳以上2例、他1例)、陰性は3例(2歳未満1例、65歳以上1例、他1例)となった。また死亡は4例(20%、65歳以上3例、他1例)であった。【考察】これまでの報告で指摘されている基礎疾患を持たない症例が70%と高値を示しており、指摘されている基礎疾患を持たなくとも発症しうることが指摘された。WBC値、CRP値共に平均的に高値を示しており、敗血症の症状として妥当である。尿中抗原検査を施行した症例は6例と少なかったが、それらの症例における尿中抗原陽性率は50%であり低い陽性率となった。これは尿中抗原が陰性でも肺炎球菌菌血症を否定できないことを示唆している可能性があり注意が必要である。

血液培養提出患者におけるプレセプシン測定

¹高知医療センター 消化器外科

○福井 康雄¹

血液培養検査提出患者において新規敗血症バイオマーカー・プレセプシン測定の意義を検討した。対象：2010年6月~2011年3月の期間に救急外来において感染症を疑い血液培養検査を提出した患者。方法：外来受診時にプレセプシン、プロカルシトニン、IL-6、CRP、白血球を測定し血液培養結果などとの関連を検討した。尚、感染陽性の判断は血液培養結果及びその他の細菌検査結果陽性に加え理学画像所見により行った。結果：症例数は27例。性別は男性13、女性14。疾患の内訳は急性腹症8、呼吸器疾患7、腎盂腎炎5、皮膚軟部疾患3、胆管炎2、その他2であった。血液培養陽性は12例(44%)。感染陽性症例は24例(88%)、感染陰性症例は3例(十二指腸潰瘍穿孔1、絞扼性イレウス2)であった。全てのマーカーにおいて血液培養陽性群と陰性群の間に有意差は認めなかった。一方、感染陽性群と感染陰性群の比較ではプレセプシンのみ感染陽性群が有意に高値を示した。(p=0.04) プレセプシンのカットオフ値を800ng/mlとした場合の感度は95.8%、特異度は100%であった。考察：その他のマーカーと比較してプレセプシンは感染症に対してより特異的に上昇していた。又、血液培養提出時のプレセプシンが低値の場合はその時点での病態としては感染症以外の疾患を考慮すべきである。